竹の伐採プロセスを活用した企業研修プログラムの提案

-アイデアを自由に発言できる活気ある職場を目指して-

森と木のクリエーター科　森林環境教育専攻　　北倉　裕美

１．研究背景

私はＯＬ時代、会社のために提案したアイデアや提案を聞いてもらえない日々を過ごしていた。そのため、いつしかアイデアを口にすることを諦めるようになってしまった。アイデアを出しずらい職場の社員は、仕事にやりがいを感じず、ストレスや不満が溜まっていく。また、会社にとっても社員からのアイデアが得られないことはイノベーションの機会を逃し、有能な人材を失うことにもつながる。この問題は社員・会社の両者にとって、大きな損失だ。そしてこの問題は多くの会社が抱える社会の課題でもあった。

残りの人生を考え、もっと充実した人生を送りたいと思い、私はアカデミーに入学した。

授業の中で、「アイデアを自由に出し合える場」が当たり前のようにある現場と遭遇し、自然の中でこんな場所をつくる人になりたいと思うようになった。そんな時に出会ったのが「竹」だった。

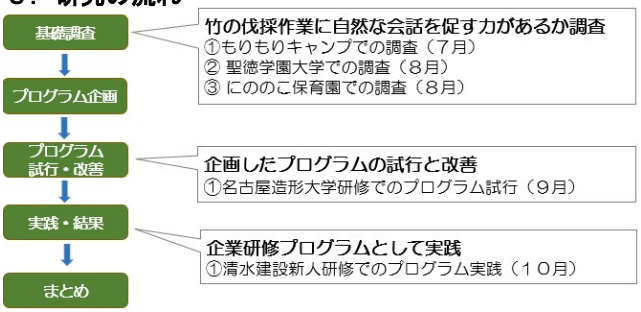
竹の伐採作業を仲間と行う中で、気持ちやアイデアを遠慮なく伝えている自分に気がついた。単なる作業としてしか見ていなかった竹の伐採作業には、特別な力があるのかもしれないと思った。この竹の伐採プロセスを活用すれば「アイデアを出しやすい場」を体験できるプログラムを創り出せるのではないかと考えた。

そしてそれを企業研修に取り入れれば、アイデアを自由に発言できる活気ある職場づくりにつながるのではないかと考えた。

２．目的

竹の伐採プロセスが「アイデアを出しやすい場」を体験できる企業研修のプログラムになるのか、企画・実践を通してその可能性を確かめることを研究の目的とした。

３．研究の流れ



４．基礎調査

竹の伐採作業自体に自然な会話を促す効果があるのかをもう一度確かめるため、異なる年齢層を対象に、竹の伐採作業の中でどのような会話が生まれてくるのかを観察した。さらに伐採するだけでなく、伐採した竹で流しそうめん台をつくる体験も行い、そこでの会話も観察することにした。

調査①　もりもりキャンプ…13 名　小中学生対象
　　（2024 年７月　＠森林文化アカデミー）
調査②　聖徳学園大学ゼミ合宿…11 名　大学生対象
　　（2024 年８月　＠森林文化アカデミー　）
調査③　にののこ保育園…　６名　大人対象
　　（2024 年８月　＠にののこ保育園）

竹の伐採作業と流しそうめん台づくりには、どの年齢層に対しても自然な会話を促す力があった。これらのプロセスを企業研修プログラムとして活用することの可能性が見えてきた。

５．プログラム企画

企業研修プログラムとして発展させていく上で次の**３つのことを意識して**企画を始めた。

１．安心安全な場で、自分の内側にあるものを表現して受けとめてもらう体験から始める

アイデアや意見が活発に出るようにするためには、ウォーミングアップと安心な場を整えることが重要だ。自分の内側や気持ちを仲間やパートナーに安心して表現できる環境を整えることを目指した。

＜具体例＞
・チェックイン（自分の気持ちを表に出す）
・ペアで歩きながらの対話

２．頻繁にアイデアを出し合って「決める」機会を設ける

チームでの意思決定プロセスでは、アイデアを出し合うことが必要になる。この体験を通じて、「アイデアを出し合う場の雰囲気」や「アイデアを出したり受け入れたりすることの感触」を感覚的に理解してもらうことを目指した。

＜具体例＞
・チームを決める
・切る竹を選ぶ
・竹を倒す方向を決める
・竹を運ぶルートを決める
・流しそうめん台の形を決める

3. 条件・制限・障害（リスク）を加える

アイデアや意見が活発に出るためには、参加者が課題を真剣に「自分ごと」として受けとめることが重要だ。適切なリスクや条件を設け、適度な負荷をかけることで、積極的なアイデアの出し合いが生まれることを目指した。

＜具体例＞

・１人でもできる竹の伐採をあえて８人でやる
・時間制限
・目隠しで作業する
・使える道具や素材を制限する
・「今まで見たことがない」
・「全員が納得する方法で」

６．試行プログラム

◆2024.9.10-12 名古屋造形大学自然体験研修

完成したプログラムを名古屋造形大の学生 20 名に試行した。活動中は活発にアイデアが出され受けとめ合い、行動する姿が観察できた。今回のグループは日本人学生と基礎レベルの日本語ができる中国人学生の混合クラスだったが、言葉の壁を感じさせぬほどお互いに意見を出し合い、課題を達成していた。

しかし課題も残った。何のためにそのプログラムをやるのかをうまく伝えることができず自分ごととして体験できていない参加者もいた。

プログラムを進行するファリシテーターの導入の仕方の重要性を改めて知った。

７．実践・結果

◆2024.10.29-30 清水建設株式会社新入社員研修

試行プログラムでの結果を参考に改善した研修プログラムを清水建設株式会社新入社員 23 名の研修の中で実践し、参加者の反応を観察した。

竹の伐採や運搬のプロセスでは、参加者が自らの意見や提案を積極的に述べ、問題解決に向けて協力して試行錯誤していた。そして、ただ意見を述べるだけでなく、課題を解決するために真剣に意見を交わし合い、積極的に話し合う場面もあり、参加者がこの課題を自らの課題として捉え、より深い対話が生まれていることを感じた。

目隠しで竹を伐採する場面では、安全確保のためにさまざまな提案や相談が活発に行われていた。目隠しをしている参加者に対して、周囲の状況を頻繁に伝えることで安心感を与え、お互いの信頼を築きながら、協力して共通の目標に向かって進む姿が確認できた。

流しそうめん台づくりでは、「シーソーみたいにしよう！」という創造的なアイデアが出され、また素材の制限が新たなアイデアを生み出すきっかけとなっていた。そして、出来上がった流しそうめん台はどのチームもユニークで１つとして同じでなかった。これはアイデアを出し合えていた証拠だと言える。

最後は自分たちで作った流しそうめん台で、流しそうめんを楽しんだ。材料の竹を取るところから始めて、食べるところまで、一連の流れをたった１日で体験できてしまう企業研修プログラムの素材としての「竹」のポテンシャルを改めて感じた。

８．まとめ

以上の実践の観察から、竹の伐採プロセスは「アイデアを出しやすい場」を体験できる企業研修のプログラムとして可能性がある！と言える。

しかし、この結果は、現場での観察や参加者の反応から得たものであり、正確性に欠けていると言える。このプログラムに特化したアンケートを取ることもできず、録音や録画など十分なデータや記録が一切残っていないという大きなミスを犯してしまった。

唯一の手がかりとして残っていた、２日間の研修全体に対するアンケート結果を見ると、19 名の参加者のうち約半数が、「仲間と一緒に竹を切って流しそうめん台を作ったこと」を２日間の研修で最も印象に残った体験として挙げていた。清水建設株式会社の人事部からもプログラムに対して高い評価をいただいた。

これまで、単なる作業としてしか捉えられていなかった竹の伐採プロセスには、これだけ大きなポテンシャルがあることが分かった。

５．今後の展望

竹にはまだまだ多くの魅力がある。手に入りやすい素材で、再生可能、なおかつ加工も簡単。また、衣・食・住・アート・音楽・遊びなど切り口も豊富だ。このような竹の多彩なポテンシャルを活用すれば、さまざまなタイプの企業研修プログラムとして発展させることができることが分かった。

将来、私は「人と人がつながる」ことを促すファシリテーターとして活動したいと思っている。この課題研究を通じて、清水建設株式会社という大企業の研修を舞台にファシリテーターとしての実践をすることができた。自分自身の在り方について深く考えさせられ、今まで自分が気づいていなかった自分に気づく良い機会となった。ファシリテーターとしての経験や技術はまだまだ成長途中だが、働く人々がやりがいを持って活躍できる社会を共に築くため、現場で学び続け、前に進んでいきたいと思っている。